

---

# BLEACH + 企画 & 短編小説集

日番谷冬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

BLEACH + 企画&短編小説集

### 【Nコード】

N9609N

### 【作者名】

日番谷冬

### 【あらすじ】

ちよつとした企画で書いた、BLEACHの詩や短編小説をまとめて掲載させて頂きます。夢、台本、パレル、CPなど日番谷中心でなんでもあります。たまに他CPも書きます。BLもあります。が、今のところはあくまで前提や後付けがそうになっているだけであって、内容はBLに興味の無い方でも読めるものになっています。更新はマイペースですが、連載更新までの暇潰しにでもどうぞ。

優しさと温もりと……（十番隊＋／温）

「……………あ”ー……………」

視界に広がる白。

横向きに倒れて見える家具。

朝の空気に反響し、自分の耳へと届く掠れた声。

「時間……………過ぎちまったな……………」

涙で霞んだ視界。

熱を帯びた重い体。

全く働こうとしない、己の頭。

「……………39度7分……………か」

十番隊隊長、日番谷冬獅郎。

どうやら風邪を引いてしまったらしい。

「……仕方ねえ。松本と……卯ノ花に連絡入れとくか……」

あまり他人の世話になるのは好きではないのだが……

体を引き摺るように、布団から起き上がる。

そのまま卓上の伝令神機へと手を伸ばし、ボタンを押した

\* \* 優しさと温もりと…… \* \*

「で……なんでテメエらまで来やがるんだ……」

その小さな唇から溢れるのは、深い深い溜め息。

先程よりも頭痛が増したのは、気のせいではない筈だ。

部屋の入り口。

卯ノ花の後ろに見える、男男男……

「檜佐木……誰から聞いた？」

「え”っ……あーいや、えっと……」

「誰から聞いた？」

「……乱菊さんに……」

「……阿散井、テメエは」

「俺は、檜佐木さんに聞きました。あ、鯛焼き持って来たんスよ！  
よかつたら」

「気持ちは有り難いが今は要らねえ」

「……そっスか」

「……京楽」

「二人が廊下で話してるのを、偶然聞いたんだよ。大丈夫かい？」

「……浮竹は京楽からか」

「ああ。冬獅郎が熱を出したって聞いて、いてもたってもいられなくなってね」

松本から檜佐木へ。

後はまるで伝言ゲームのように、人から人へと伝わって……今の現状に繋がったらしい。

「日番谷。熱は……」

「朽木……」

次から次へと訪れる来客。

この様子では、恐らくこの事を知る人物はまだまだいそうだ。

「ああ、そういえば……後で元柳斎先生も来るって言ってたな」

「……断つといってくれ」

訂正。

確実に知れ渡っている。

「……ただの風邪ですね。過労による免疫力の低下が原因でしょう。少し安静にすれば、良くなる筈ですわ」

「そう……っスか……」

「薬を出しておきます。」

今日はこれを飲んで、ゆっくりしていて下さい。

皆さんも、早く出て行つて下さいね。

日番谷隊長が休めませんわ」

「しかし」

「出て行つて下さいね？」

「「「……はい」「」」

手慣れた様子で人払いをする卯ノ花。

やがて彼らの足音が遠退き、完全に聞こえなくなった頃……部屋に残った卯ノ花も、入り口へと歩き出す。

その背中を、日番谷は小さく呼び止めた。

「卯ノ花」

「はい？」

「……有り難う」

「……………お大事に」

変わらぬ微笑みを浮かべる卯ノ花。  
やがてその笑顔は、襖の奥へと消えた。

再び静まり返る室内。  
先程までの騒ぎが嘘のように感じる。  
あまりに、違いすぎて。

「…………一人…………か…………」

こんな時…………流魂街にいた時なら、ばあちゃんが傍に居てくれた。  
家を出て、霊術院に入ってから…………こんな静寂をよく感じていた。

草冠と出会ってから、少しは変わったけれど…………今小さく心に  
浮かんだ感情は、あの頃のそれと酷似している気がする。

「…………寂しくなんかねえぞ…………」

一人呟き、布団を口元まで被ってみる。



寂しくない。

慣れているから。

温もりが恋しいなんて、そんな事……絶対に無い。

「……………寝るか……………」

この空間には自分しか居ないのだから、返事が返る筈もなく。  
徐々に大きくなる感情を誤魔化すかのように、眉を潜め寝返りを  
うつ。

無意識に伸ばした手のひらを固く握り締め……重力に任せるかの  
ように瞼を閉じた。

『大丈夫かい？ 冬獅郎……………』

『ん……………ばあ、ちゃん……………？』

耳に届く、懐かしい声。

ゆっくりと開いた瞳に映るのは、優しく暖かい祖母の笑顔。

『卵粥、作ってあるからね。食べれるかい？』

『……………ん……………』

これは夢か……

腕に力を入れ、そつと体を起こす。

まだ朧気な意識の中、辺りを見渡した。

暖かな暖炉。

外から聞こえる、子供たちのはしゃぎ声。

懐かしい景色。

全てが……同じだった。

『寂しいなんて思ったから……………こんな夢を見たのか……………』

かけられた布団に鼻を近付ける。

『……………はあちゃんのおいだ……………』

大好きだった、あのにおい。  
不安だった気持ち、ほんの少し……落ち着いた気がした。

『……………ばあちゃん……………』

ふと顔を上げたと同時……額にあてがわれた、少しひんやりとした手のひら。

『……………まだ熱があるねえ』

『……………ばあちゃん……………』

『何を不安になる事がある。冬獅郎……お前には、大切な仲間が出来たんじゃなかったのかい？』

この前の休み……ばあちゃんに色々聞かせてくれたらう？』

『……………』

心地よいその声は、言葉は、日番谷の耳に子守唄のように入ってきた。

体の力が抜けていく。

瞼が、再び重くなる。

『もう少し寝ときなさい。ばあちゃん、タオル持ってくるからね』

『……………なあ、ばあちゃん。一つ……………頼んでもいいか？』

『ああ……………構わんよ』

これがただの夢であるなら。

俺の心が生み出した、幻であるなら。

だったら、もう少し…………

『…………俺が寝るまで……………一緒に……………いて、ほしい……………』

甘えてみても、いいのだろうか。

『……仕方ないねえ……』

本当に、可愛い子だよ……お前は』

優しく頭を滑る、しわしわの手。

そのリズムに促されるかのように、日番谷は再び目を閉じた。  
まだ少し寂しい気もするけれど……もう大丈夫だ。

『有り難う……ばあちゃん………』

自分の声が遠くなるのを感じながら、日番谷は再び……深い眠り  
へと落ちていった。

「……ん………」

再び目を開けた時、そこにあつたのは見知った天井だった。  
家具も、景色も……全てが自分の見慣れたもの。  
そして、周りにはやはり誰もいない。

ふと時計に視線を移す。

時刻は18時を回っていた。

……コトン

「……………ん？」

静寂の中響いた、小さな物音。  
そして気づいたのは、鼻を擽る何かのにおい。  
台所の方から、誰かの気配を感じる。  
それは、同じく感じ慣れた、あの女のもので……

「……………松本……………」

近付いてくる足音。  
台所から出てきたのは、予想していた通りの人物。

「あっ、起きました？」

「松本……………お前なんで……………」

「んもう、決まってるじゃないですか…お見舞いですよ、お見舞い！  
卵粥作っただです。食べません？」

「……………食べる……………」

卵粥という響きに、夢の中で感じた温もりを思い出した。  
もしかしたらあれは、松本だったのかもしれない。

「卯ノ花隊長から聞いてますよ、過労だって。隊長無理し過ぎなんですよ」

「誰のせいだと思ってやがる。……つかお前、仕事はどうした」

「仕事なら終わりましたよ？」

「……………は？」

聞き慣れない言葉に顔を上げる。

するとそこには、松本のどこか嬉しそうな笑顔があった。

「それが聞いて下さいよたいちよ、朝隊長から連絡貰ったあと、隊士達に事情話したんです。

最初は皆隊長がいなくて心配してたんですよ？ でもその話したら、今度は皆燃え上がったちゃって……『俺が隊長の力になるん

だー』って。

執務の方も、いつもの倍は速かったんじゃないかしら？

あっ、勿論あたしも頑張りましたからね！ 隊長にこれ以上無理はさせられませんから」

「……そうか……あいつら………」

そうだ……俺にはこいつらがいる。

大切な仲間……十番隊。

そして……

「隊長一人で食べれます？ なんならあたしがく・ち・う・つ・し・で」

「要らんっ！！／＼／」

「冗談ですよ」

目の前で笑う、大切な副隊長。

（一人なんかじゃなかったな……ばあちゃんの言う通りだ……）



俺の新しい居場所。

家族。

こんな身近にいたのに、一時でも忘れていたなんて……

「あつ、そうだ。後で皆お見舞いに来るって言ってましたよ」

「……皆？」

『馬鹿、押すな!』

『押したのはそっちだろ!?!』

『静かにして下さいよー、隊長が起きちゃいますっ。』

「……もう来ちゃったみたいですね」

「……………」

ドタバタと響く足音。

そして続く、スパーンという威勢のいい襖の開く音。

「……隊長、ご無事ですかっ!?!」

「……………ああ……………」

飛び込んで来たのは、何十もの隊士達。

入りきれていないが、廊下にも結構な人数が立っている。

まさか全員で来たのだろうか……………揃いも揃って心配そうな顔。

しかしその表情も、日番谷の返答で安堵の笑顔へと変わった。

そんな彼らの様子に、思わず小さな笑みが溢れる。

「ふふ……………愛されてますね、たいちよ」

「……………そうだな」

普段なら怒鳴り飛ばしているであろうざわめき。

しかしそれすらも、今はいくらか心地よく感じた。

護りたい居場所。

護りたい人達。

病気の時は人肌が恋しくなると聞いた事がある。

それを今日実感して……………同時に、仲間の有り難みを改めて感じた。

「松本……………お前ら……………有り難う……………」

今なら、素直になれる気がする。

「これからも……俺に、ついて来てくれるか……？」

「……はいつ……！」

「勿論ですよ。あたし今日はずっと傍にいますからね？  
隊長に、寂しい思いはさせませんから。お粥食べて薬飲んだら、  
安心して寝て下さい」

「……ああ……」

頭を撫でる手。

ばあちゃんの時に感じたのと同じ温もり。

松本の優しさが、残った不安を完全に拭い去ってくれた。

優しさと、温もりと……そして彼らの屈託のない笑顔。

安心出来る居場所。

この新しい宝物を護るために……明日からまた、頑張ろう。

だから今だけ……この空間に、身を委ねて。

有り難う……大好きだ。

ちなみに……

後日発行された瀟靈廷通信にこの日の熱っぽい寝顔が掲載され、隊舎に日番谷の怒鳴り声が響いたのは……言うまでもない。

優しさと温もりと……日番谷猫化Ver（前書き）

遊びました

優しさと温もりと……日番谷猫化Ver

「……………あ”……………」

視界に広がる白。

横向きに倒れて見える家具。

朝の空気に反響し、自分の耳へと届く掠れた声。

「時間……………過ぎちまったにや……………」

涙で霞んだ視界。

熱を帯びた重い体。

全く働こうとしない、己の頭。

「……………39度7分……………か」

言葉からも察せられる通り、現在数日前に巻き込まれた涅マユリの馬鹿な実験によって、何故か猫化させられている銀髪碧眼の子供。十番隊隊長、日番谷冬獅郎。彼はどうやら風邪を引いてしまったらしい。

「……仕方ねえにや。松本と……卯ノ花に連絡入れとくか……」

あまり他人の世話になるのは好きではないのだが……

体を引き摺るように、布団から起き上がる。

そのまま卓上の伝令神機へと手を伸ばし、ボタンを押した

\* \* 優しさと温もりと…… \* \*

「で……にやんでデメエらまで来やがるんだ……」

その小さな唇から溢れるのは、深い深い溜め息。

先程よりも頭痛が増したのは、気のせいではない筈だ。

部屋の入り口。

卯ノ花の後ろに見える、男男男……

「檜佐木……誰から聞いたにゃ？」

「え”っ……あーいや、えっと……」

「誰から聞いたにゃ？」

「……乱菊さんに……」

「……阿散井、テメエは」

「俺は、檜佐木さんに聞きました。あ、マグロ持って来たんスよ！  
よかつたら」

「マグロ……／＼／」

……あ……コホン。気持ちは有り難いが今は要らねえにや……」

「……そつスカ（今スツゲエ食いたそうだったな、この人）」

「……京楽」

「二人が廊下で話してるのを、偶然聞いたんだよ。大丈夫かい？  
耳が元気無いみたいだけど」

「うつせ！／＼」



……浮竹は京樂からか」

「ああ。冬獅郎が熱を出したって聞いて、いてもたってもいられなくなつてね」

松本から檜佐木へ。

後はまるで伝言ゲームのように、人から人へと伝わって……今の現状に繋がつたらしい。

「日番谷。熱は……」

「にゃ……朽木……」

次から次へと訪れる来客。

この様子では、恐らくこの事を知る人物はまだまだいそうだ。

「ああ、そういえば……後で元柳斎先生も来るって言ってたな」

「……断つといってくれにゃあ」

訂正。

確実に知れ渡っている。

「……ただの風邪ですね。過労による免疫力の低下が原因でしょう。涅槃隊長に飲まされたという変な薬液のせいではありませんから、ご安心下さい。

少し安静にすれば、良くなる筈ですわ」

「そう……にや………」

「薬を出しておきます。

今日はこれを飲んで、ゆっくりしていて下さい。

皆さんも、早く出て行って下さいね。

日番谷隊長が休めませんわ」

「しかし」

「出て行って下さいね？」

「「「………はい」「」」

手慣れた様子で人払いをする卯ノ花。

やがて彼等の足音が遠退き、完全に聞こえなくなった頃……部屋に残った卯ノ花も、入り口へと歩き出す。

その背中を、日番谷は小さく呼び止めた。

「卯ノ花」

「はい？」

「……ありがとにゃ……」

「………お大事に」

変わらぬ微笑みを浮かべる卯ノ花。  
やがてその笑顔は、襖の奥へと消えた。

再び静まり返る室内。  
先程までの騒ぎが嘘のように感じる。  
あまりに、違いすぎて。

「………一人……か……」

こんな時………流魂街にいた時なら、ばあちゃんが傍に居てくれた。  
家を出て、霊術院に入ってから………こんな静寂をよく感じていた。

草冠と出会ってから、少しは変わったけれど………今小さく心に  
浮かんだ感情は、あの頃のそれと酷似している気がする。

「……寂しくなんかねえにや……」

一人呟き、耳も尻尾も垂らして布団を口元まで被ってみる。

寂しくない。

慣れているから。

温もりが恋しいなんて、そんな事……絶対に無い。

「……………寝るか……………」

この空間には自分しか居ないのだから、返事が返る筈もなく。

徐々に大きくなる感情を誤魔化すかのように、眉を潜め寝返りをうつ。

無意識に伸ばした手のひらを固く握り締め……重力に任せるかのように瞼を閉じた。

『大丈夫かい？ 冬獅郎……………』

『ん……………ばあ、ちゃん……………？』

耳に届く、懐かしい声。

ゆつくりと開いた瞳に映るのは、優しく暖かい祖母の笑顔。

『卵粥、作ってあるからね。食べれるかい？』

『……………ん……………』

これは夢か……

腕に力を入れ、そつと体を起こす。

まだ朧気な意識の中、辺りを見渡した。

暖かな暖炉。

外から聞こえる、子供たちのはしゃぎ声。

懐かしい景色。

全てが……………同じだった。

『寂しいにゃんて思ったから……………こんな夢を見たのか……………』

かけられた布団に鼻を近付ける。

『……ばあちゃんのおいじゃ……』

大好きだった、あのおい。

不安だった気持ち、ほんの少し……落ち着いた気がした。

『ほんの数カ月見ない間に、随分とまあ可愛らしい姿になったもんだねえ』

『／／／……これは……』

ふと顔を上げたと同時に……額にあてがわれた、少しひんやりとした手のひら。

『……まだ熱があるねえ』

『……ばあちゃん……』

『何を不安になる事がある。冬獅郎……お前には、大切な仲間が出来たんじゃなかったのかい？』

この前の休み……ばあちゃんに色々聞かせてくれたらう？』

『……………』

心地よいその声は、言葉は、日番谷の耳に、子守唄のように入ってきた。

体の力が抜けていく。

瞼が、再び重くなる。

『もう少し寝ときなさい。ばあちゃん、タオル持ってくるからね』

『……………なあ、ばあちゃん。一つ……頼んでもいいか？』

『ああ……構わんよ』

これがただの夢であるなら。

俺の心が生み出した、幻であるなら。

だったら、もう少し……

『……俺が寝るまで……一緒に……いて、ほしい……にゃ……』

甘えてみても、いいのだろうか。

『……仕方ないねえ……』

本当に、可愛い子だよ……お前は』

優しく頭を滑る、しわしわの手。

そのリズムに促されるかのように、日番谷は再び目を閉じた。  
まだ少し寂しい気もするけれど……もう大丈夫だ。

『有り難う……ばあちゃん……』

自分の声が遠くなるのを感じながら、日番谷は再び……眠りへと



落ちていった。

「……………」

再び目を開けた時、そこにあっただのは見知った天井だった。  
家具も、景色も……全てが自分の見慣れたもの。  
そして、周りにはやはり誰もいない。

ふと時計に視線を移す。

時刻は18時を回っていた。

……………コトン

「……………」  
「………」

静寂の中響いた、小さな物音。

そして気づいたのは、鼻を擽る何かのにおい。

台所の方から、誰かの気配を感じる。

それは、同じく感じ慣れた、あの女のもので……

「……………松本……………」

近付いてくる足音。

台所から出てきたのは、予想していた通りの人物。

「あつ、起きました？」

「松本……………お前にやんで……………」

「んもう、決まってるじゃないですか…お見舞いですよ、お見舞い！  
卵粥作っただんです。食べません？」

「……………食べる……………」

卵粥という響きに、夢の中で感じた温もりを思い出した。  
もしかしたらあれは、松本だったのかもしれない。

「卯ノ花隊長から聞いてますよ、過労だつて。隊長無理し過ぎなんですよ」

「誰のせいだと思ってやがるにや。……………つかお前、仕事はどうした」

「仕事なら終わりましたよ？」

「……………は？」

聞き慣れない言葉に顔を上げる。

するとそこには、松本のどこか嬉しそうな笑顔があった。

「それが聞いて下さいたいちよ、朝隊長から連絡貰ったあと、隊士達に事情話したんです。

最初は皆隊長がいなくて心配してたんですよ？ でもその話したら、今度は皆燃え上がっちゃって……………俺が隊長の力になるんだー」って。

執務の方も、いつもの倍は速かったんじゃないかしら？

あつ、勿論あたしも頑張りましたからね！ 隊長にこれ以上無理はさせられませんから」

「……………そうか……………あいつら……………」

そつだ……………俺にはこいつらがいる。

大切な仲間……………十番隊。

そして……………

「隊長一人で食べれます？ なんならあたしがく・ち・う・つ・し・  
で」

「要らねえにやつ！！／／／」

「冗談ですよ。赤くなっちゃって、可愛いんだからVV」

「……………／／／」

目の前で笑う、大切な副隊長。

（一人なんかじゃなかったな……………ばあちゃんの言う通りだ……………）

俺の新しい居場所。  
家族。

こんな身近にいたのに、一時でも忘れていたなんて……………

「あつ、そうだ。後で皆お見舞いに来るって言うてましたよ」

「……………皆？」

『馬鹿、押すな!』

『押したのはそっちだろ!?!』

『静かにして下さいよー、隊長が起きちゃいますっ。』

「……もう来ちゃったみたいですね」

「……………」

ドタバタと響く足音。

そして続く、スパーンという威勢のいい襖の開く音。

「……隊長、ご無事ですか?!?」

「……………ああ……………」

飛び込んで来たのは、何十もの隊士達。

入りきれていないが、廊下にも結構な人数が立っている。

まさか全員で来たのだろうか……揃いも揃って心配そうな顔。

しかしその表情も、日番谷の返答で安堵の笑顔へと変わった。そんな彼らの様子に、思わず小さな笑みが溢れる。

「ふふ……愛されてますね、たいちよ」

「……………そうだにゃ」

普段なら怒鳴り飛ばしているであろうざわめき。  
しかしそれすらも、今はいくらか心地よく感じた。

護りたい居場所。

護りたい人達。

病気の時は人肌が恋しくなると聞いた事がある。

それを今日実感して……同時に、仲間の有り難みを改めて感じた。

「松本……お前ら………有り難う………」

今なら、素直になれる気がする。

「これからも……俺に、ついて来てくれるか……？」

「「「………はいっ………」」」

「勿論ですよ。あたし今日はずっと傍にいますからね？  
隊長に、寂しい思いはさせませんから。お粥食べて薬飲んだら、  
安心して寝て下さい」

「……ああ……」

頭を撫でる手。

無意識に尻尾が揺れているのが、自分でもわかった。

ばあちゃんの時に感じたのと同じ温もり。

松本の優しさが、残った不安を完全に拭い去ってくれた。

優しさ、温もりと……そして彼らの屈託のない笑顔。  
安心出来る居場所。

この新しい宝物を護るために……明日からまた、頑張ろう。

だから今だけ……この空間に、身を委ねて。

有り難う……大好きだ。

「あつ、そうだ。恋次からマグロ預かってますよ」

「マグロ……／＼／」

「やっぱり、ほんと食べたかったんじゃないですか」

「……………／／／」

「ふふ…あとで恋次にお礼しとかなきゃですね」

「……………そうだにゃ……………」

ちなみに……………

後日発行された瀨霊廷通信に、この日の猫化のうえ熱でどこか艶っぽい寝顔が掲載され、隊舎に日番谷の怒鳴り声が響いたのは……………  
言うまでもない。



小さな願いと隠した想い（市日ノ切）（前書き）

七夕の企画で執筆したものです。

小さな願いと隠した想い（市日ノ切）

「隊長、もう短冊書きました？」

「あ……？」

「あ、また忘れてたんですか？」

「相変わらず仕事熱心なんですから……今夜ですよ、七夕。皆でパ  
ーッとやるって約束してたじゃないですか」

「ああ……そうだったな……七夕か……」

七月七日。

現世に伝わる国民的行事の一つ。

この日短冊に願い事を書き笹の葉に吊るしておく、願いが叶う  
とかなんとか……

此処、十番隊の執務室には、既に夕日が射し込んでいる。

日没まで然程時間はかからないだろう。

窓辺に近付き窓を開け放つ。

入り込んで来た風が、頬をくすぐった。

「そついや……確か現世は雨らしいな」

「えーっ、そうなんですか!？」

「じゃあ織姫と彦星会えないじゃない!」

「……井上が、どうした?」

「そっちの織姫じゃありませんよ。」

「いいですか隊長。現世には七夕に纏わるこんな話があるんです」

それは切ない恋物語。

夜空に輝く天の川のほとりに、天帝の娘で織女と呼ばれるそれは美しい天女が住んでいました。

織女は、天を支配している父天帝の言いつけをよく守り、毎日機織りに精を出していました。

織女の織る布はそれは見事で、五色に光り輝き、季節の移り変わりと共に色どりを変える不思議な錦です。

天帝は娘の働きぶりに感心していましたが、年頃の娘なのにお化粧一つせず、恋をする暇もない娘を不憫に思い、天の川の西に住んでいる働き者の牽牛という牛飼いの青年と結婚させることにしました。

こうして織女と牽牛の二人は、新しい生活を始めました。

しかし、結婚してからの織女は牽牛との暮らしに夢中で毎日はいやぎまわってばかり。

機織りをすっかり止めてしまったのです。

天帝も始めはこんな二人の様子を新婚だからと大目に見ていましたが、いつまでもそんな有様が続くと眉をひそめざるを得ません。

天帝はすっかり腹を立ててしまい、二人の所へ出向くと、

「織女よ、はたを織ることが天職であることを忘れてしまったのか。心得違いをいつまでも放っておく訳にはいかない。

再び天の川の岸边に戻って機織りに精を出しなさい」

更に付け加えて

「心を入れ替えて一生懸命仕事をするなら一年に一度、七月七日の夜に牽牛と会うことを許してやろう」と申し渡しました。

織女は牽牛と離れて暮らすのがとても辛く涙にくれるばかりでしたが、父天帝に背く事もできず、牽牛に別れを告げると、うな垂れて天の川の東に帰って行きました。

それ以来、自分の行いを反省した織女は年に一度の牽牛との再会を励みに、以前のように機織りに精を出すようになりました。

牽牛も勿論思いは同じ、働いて働いて…七月七日を待ちました。

こうして、牽牛と織女は互いの仕事に励みながら、指折り数えて七月七日の夜を…

ところが、二人が待ち焦がれた七月七日に雨が降ると、天の川の水かさが増して、織女は向こう岸に渡ることができなくなります。川下に上弦の月がかかっている、つれない月の舟人は織女を渡してはくれません。

二人は天の川の東と西の岸边にたたずみ、お互いに切ない思いを交しながら川面を眺めて涙を流すのでした。

「つまり今夜が雨なら、織姫と彦星はまた来年まで待たなきゃならないんですよ」

「…………へえ……………」

松本の話に耳を傾けながら、暗くなりつつある空へと視線を移す。

一年に一度しか会う事の許されない、離れ離れとなった二人。  
現世は雨…………だが尸魂界は…………

「せめてこっちでは、晴れてほしいですけどね」

「……………そうだな」

もしも晴れていたら、あいつは迎えに来てくれるだろうか。

考えて、やめる。

馬鹿馬鹿しい……そんな事ある筈がない。

あいつとは引き離れたわけじゃない。

あいつが自分からいなくなったんだ。

俺達の前から。

「じゃあ、あたし最後の仕上げして来ちゃいますね。

隊長もすぐに来て下さい。

短冊、忘れないで下さいよー?」

「ああ……わかってる」

俺の願いはただ一つ。

だがそれも、もう届くことはないのだろう。

きっと織姫にも彦星にも……天帝とやらでさえ、叶える事は難しいように思う。

ただ、もしも今日、織姫と彦星が出会えたのなら……そんな細や

かな望みくらいは、持っていてもいいだろうか。

「…………行くか……………」

手にした短冊に筆を走らせる。

青い色をしたそれを手に窓を閉じると、日番谷はそつと、執務室を後にした。

- - - - -

「ちょっと、こつち酒足んないわよー!」

「テメエは飲み過ぎだ松本……………」

「いいじゃないですかぁ。今夜は無礼講よーっ」

「…………ハア……………」

満点の星空の下、笹に下げられた200枚もの短冊。

十番隊に配属されている隊士皆が、此処に集まり大騒ぎしていた。

そんな中日番谷だけが……時々反応を返しはするものの大して盛り上がりもしないまま、空の一点を見つめていた。

「……あの、日番谷隊長」

「ん……なんだ？」

「いつ、いえ！」

あの……日番谷隊長は、飲まないんですか……？」

「……………」

「……………隊長？」

「……………今日は飲む気になれなくな……………。悪い、少し出て来る」

「あつ、隊長……………！！」

落ち着かない気分を切り替えようと、星空の下歩き出した。声をかけてくる隊士達にただ一言、「すぐ戻る」とだけ告げて。

「あら？ ちょっと……………隊長は？」

「松本副隊長……………日番谷隊長なら、少し出て来ると……………」



「……………そう……………」

松本がようやく気づいたのは、日番谷が立ち去ってから10分程経ってからの事だった。

「今日の隊長、なんかおかしかったのよね……………」

長いこと一緒に居るとよくわかる。

敬愛する上司の些細な変化。

その時目に止まっていたのは、笹の一番上……………彼の書いた青い短冊。風で揺れるそれは、よく見ると何故だか両面に字が書いてある。間違えて書き直したのかとも思ったが、あの日番谷がそんなミスをするとも思えない。

近づいて手に取ってみれば、表に書かれた隊の平穏を願う言葉。それは毎年変わらない、彼の隊士を思いやる心の表れ。その事に小さく笑みを溢し、短冊を引っくり返す。すると裏面に書かれていたのは……………

「……………これって……………っ」

ポツ……ポツ……

手のひらに落ちた小さな雫。

見上げた空には、いつの間にか雲がかかり、星が見え隠れしていた。

「……雨……か……」

短冊に隠された彼のもう一つの心。

これが真実だとすれば、この雨はきっと……

「……仕方ないわね。」

あたし、隊長迎えに行くわ。

あんた達は先に片付けて、隊舎に戻ってなさい」

「はい」

隊士達に指示を出し、自分は瞬歩で走り出す。

目指すは三人の思い出の場所。

あたしと隊長と……そしてあんた。

三人だけの、秘密の場所。

「ほんとに世話が焼けるんだから……」

あたしも、あんたも。

結局あの人には甘いのかもしれない。

雨に濡れた髪を靡かせながら、松本は小さく苦笑いを浮かべた。

「……………雨……………」

森の奥にある、一本の大きな木。

湖が眼下に見渡せるその枝に腰掛け、日番谷は空を見上げた。

木々の間から伝い落ちてくる雫に、濡れた髪が重力に乗って下へと垂れ下がる。

頬や首筋に張り付いた銀色のそれも、今は払う気になれなかった。

「結局……会えねえんだな」

一年に一度の再会の日。

雨が降ってしまったならば、二人はもう、会う事が出来ない。

『ボクと一緒にいたら、きっと日番谷はんは汚れてまう。  
綺麗な生き方も、綺麗な死に方も出来へんよ。  
それでもええの？』

『安心しい、ボクは何処にも行かんよ。  
ずっと冬の傍におる』

『冬。ボクな……最期に見るのが君の顔やったら、それだけできつ  
と満足やわ』

『ボクは……綺麗なままの君が好きやで』

『……ごめんな………』

ずっと一緒にいると言ったくせに。

俺のどんなに可愛いげの無い言葉も、態度も……好きだと言って受け止めてくれたのに。

離れないと言ってくれたのに。

「……嘘つき……」

あの日……最後に一夜を共にした日。

最期とか、死ぬとか……珍しくそんな話ばかり持ち出して来たあいつ。

俺の問いには何も答えず、ただ好きだと……そしてごめんな、と……そんな言葉だけを残して消えたあいつ。

「次に会う時は……戦場か……」

もしも今日、織姫と彦星が無事に会えたのなら、もう一度……たった一度でいい、お前に会える気がした。

敵としてではなく……大切な、想い人として。

しかし結果は、雨。

「……ははっ……馬鹿みてえ……」

瞼の上に腕を押しあて、宙を仰いだ。

乾いた笑いが唇から溢れる。

その時、隣に気配を感じた気がした。

「……あんなところにあんな事書いて……他の隊士に見られちゃいますよ?」

「……松本……」

「会いたくなっちゃいましたか?」

「……」

湖に広がる波紋は、徐々に数を増していく。  
雨音以外何も聞こえなくなっても、彼らはそこを動こうとしなかった。

「……ねえ、隊長」

「……なんだ」

「七夕の話……まだ続きがあるの、知ってます？」

「……続き……？」

「七夕の日に雨が降ると、二人は会えなくなるって話しましたよね。」

でも、そんな二人を不憫に思った鳥さんが、二人の為に橋になってくれるんです」

「橋に……？」

「だから、絶対に会えないわけじゃないんです」

「……」

天の川は、もう隠れてしまったけれど。

「此处、よく三人で来ましたよね。」

市丸とあたしは仕事をサボりに。

隊長が追い掛けて来て……そのまま一緒に」

「……そうだな」

こうして木の枝に腰掛けて。

見える景色は何一つ変わらない。

「大丈夫ですよ、隊長……ギンは嘘なんか吐いてません」

「え……」

「確かにあいつは嘘つきで、変態で……黙っていなくなるような酷い狐ですけど。」

でも、隊長を想う気持ちは本物でしたよ」

「……………」

「ですから……たとえ敵同士になっても、きっと心は繋がってます。大丈夫です……」

「松本……」

松本が自分を気遣ってくれていること、よくわかった。  
あいつの想いが偽りでない事も知っていた。

わかっていた筈だった。



「っ……………」

永遠など無いことも知っている。  
いつか別れが来ることも知っている。

あいつとの関係も、例外じゃない事くらい……………わかっていた。

ならばせめて最期まで……………

汚れても、壊されてもいいから

傍に、居させてほしかった……………。

「……………皆が待つてますよ。戻りましょ、隊長」

「ああ……………そうだな……………」

止められないのならせめて、この雨で誤魔化して。

鳥が二人の架け橋となったのなら、きっと二人は会えたのだろう。  
う。

此処からは見えないけれど、雨雲の上できつと……………年に一度の出会いを喜んでいるのだろう。

ならば俺も、信じてもいいだろうか。

この先たとえ刺し違える事になったとしても……最期の瞬間には、  
また二人の心は繋がるのだと……信じていてもいいだろうか。

七月七日、天候は雨。

七月八日……天候は晴れ。

朝露煌めく清々しい朝……あの湖から見た空には、大きな虹が架  
かっていた。

“また市丸に会えますように”

〈FIN〉

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9609n/>

---

BLEACH + 企画&短編小説集

2010年10月10日17時10分発行